

EIMEIJI SITE

永明寺遺跡

—「市道藤ノ森線」改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1996年3月

茅野市教育委員会

EIMEIJI SITE

永明寺遺跡

——「市道藤ノ森線」改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 ——

1996年3月

茅野市教育委員会

序 文

棚畠遺跡出土、最古の国宝「土偶」をもつ茅野市は、わが国における縄文文化の宝庫であり、特に国特別史跡尖石遺跡、国史跡上ノ段遺跡は全国的にも著名です。

近年、全国的に古代から中・近世の遺跡における発掘調査の増加に伴い、歴史時代の遺跡が注目されてきています。

茅野市でも家下遺跡、千沢城下町遺跡を始めとし、今まで未解明となっていた時代の究明が遺跡発掘調査により進展しつつあります。

永明寺遺跡は、遺跡名が示すように寺院の存在したという伝承がある中・近世を中心とする遺跡です。

平成7年度、茅野市建設課により、「市道藤ノ森線」の改良工事が行われることになり、それに伴い茅野市教育委員会で永明寺遺跡の発掘調査を実施しました。

遺跡が位置する中の上原は、激動の中世に上原城を拠点とした諏訪惣領家と、甲斐の武田家による合戦があった地で、今迄の発掘調査の結果を見ても『上原城下町遺跡』を中心とする中・近世の遺跡が知られています。

今回の発掘は調査範囲が狭かったこともあり、寺院址と断定できる遺構の確認はありませんでしたが、中・近世の造成面とこれに伴う遺物の発見があり、今後、全容解明に繋がる端緒になると思われます。

発掘された永明寺遺跡の貴重な文化遺産と共に、本書が、多くの人々に広く活用され、また郷土を知り学ぶことで地域文化の向上に役立てば幸いです。

最後になりましたが発掘調査から本書の作成までご協力いただきました地元の皆さん、並びに、発掘調査にかかわった多くの皆さんに厚くお礼を申し上げる次第であります。

平成8年3月

茅野市教育委員会
教育長 両角 徹郎

例　　言

1. 本書は、市道藤ノ森線改良工事に伴い、茅野市教育委員会が実施した「長野県茅野市ちの永明寺遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は茅野市教育委員会が平成7年度に実施している。調査組織等の名簿は発掘調査組織として別載してある。
3. 発掘調査は平成7年12月1日から平成8年1月9日まで実施、出土品の整理及び報告書の作成は平成8年1月10日から3月28日まで茅野市文化財調査室において行った。
4. 発掘調査から本書作成までの現場と、執筆は百瀬一郎が担当した。
5. 本報告書に掲載の遺構実測図は、それぞれ比率を記してある。
6. 調査区の基準点は国家座標基準点による。また遺構図面上に表されている北は座標北を示す。
7. 本報告にかかる出土品、諸記録は茅野市文化財調査室で収蔵、保管している。

目　　次

序　文	
例　言	
第I章 永明寺遺跡の環境	1
第1節 永明寺遺跡の位置と環境	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 遺跡の立地と周辺遺跡との地理的関係	1
3. 調査の歴史	2
第2節 永明寺遺跡周辺の遺跡	3
第II章 発掘調査の概要と諸事業の記録	5
第1節 発掘調査の経過	5
1. 発掘調査に至る経過	5
2. 発掘調査の経過	5
3. 発掘調査日誌抄	5
4. 遺物の整理と報告書作成の作業	5
第2節 発掘調査の方法	6
1. 発掘調査組織	6
2. 発掘調査区の設定	6
第3節 遺構と遺物の概要	6
1. 遺構の概要	6
2. 遺物の概要	7
第III章 発掘された遺構と遺物	8
第1節 永明寺遺跡の層序	8
第2節 遺構と遺物	9
1. 造成面	9
2. 造成面以外の調査区	11
第IV章 総　括	12
抄　　録	

第Ⅰ章 永明寺遺跡の環境

第1節 永明寺遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

永明寺遺跡は、長野県茅野市中の1904番地に所在する。JR中央本線茅野駅から北北東に約1kmの金比羅山（上原城址、標高978.1m）の山裾に位置している。

諏訪盆地の南東に位置するものは霧ヶ峰の南南西にある永明寺山（標高1119m）の山頂から南側に急勾配な斜面が続き、山裾はわずかな緩斜面を経て上川の氾濫によって形成された低位段丘面に広がり、小規模な扇状地、沖積地から成る。

永明寺山山塊の基盤は花崗閃緑岩で構成され、風化した露頭を各所で見ることができる。また所によっては、信州ローム層が堆積し、この上面を腐食土層が覆っている。山裾から中腹にかかる標高800～950m付近には涌き水が各所にあり、現在は上川中流に取水口を持つ鬼場堰に合流し上川に注いでいる。膨大な流域をもつ上川水系は、霧ヶ峰、草山、八子ヶ峰、蓼科山から八ヶ岳の山々に支流が広がり、支流の渋川、角名川、柳川、鳴岩川は上流で強い酸性を示すが、どの河川も、小河川の流量が増すと共に、酸性度は弱まっている。

集落は、山裾と沖積地に立地し、発達している。近年特に、住宅、工場、商店等の開発が急速に進み、旧集落はこうした市街地化の広がりにより中に取り込まれるようになっている。

ちの地区的幹線となる交通は、南東から北西の河成段丘沿いに上原も縦断しているJR中央東線と旧甲州街道の国道20号線が通り、東西は国道152号線が横断する。同地区は上諏訪と広大な山浦一帯の入り口として、特に流通には重要な役割を持ち、また鉄道貨物の拠点となっていた時代もあり、その中で文化の交流が生まれ、産業が興盛し発展してきた要衝である。

2. 遺跡の立地と周辺遺跡との地理的関係

永明寺遺跡は、永明寺山塊の急斜面を後背地として、両側を瘦せた尾根によって隣接する北西の千鹿頭と南東の十二坊とは区切られ、南西を向く谷が緩斜面となり、開き始める所に位置している。基盤は花崗閃緑岩で地表面に現われているものもあり、上部をこれが風化した砂礫と風成ローム層や腐食土層が覆っている。

遺跡のある谷は幅約100m、長さ約50mにわたり、階段状の水田を造った跡が果樹園として残っている。しかし、水は水田跡より下段で湧き出しており、開田にあたっては約3km離れた植原田の鬼場新堰取水口より水を引いたが、堰跡は現在永明寺山遊歩道となっている。

永明寺遺跡からは以前に上原八幡、頬樂寺、葛井神社を含めた上原城下町遺跡が広がり、構造線により一段下がる横内にある遠尾酢藏神社社叢の古木や、発掘調査が平成6年から続いている弥生時代から近世まで継続する集落遺跡である家下遺跡の一部も見ることができる。正面には赤石山系とその支脈が連なり、伊那谷と諏訪を結んできた陸路の小飼峠、枝突峠、有賀峠が一望でき、遺跡の正面は信仰の山でもある守屋山（標高1650m）である。その山裾は古くから開け、中世に創建された安国寺、甲斐の武田軍との戦いで使われた千沢城、遺跡の対峙する位置には信濃国一宮諏訪神社上社前宮が鎮座し、この周辺から西の諏訪市にある同本宮にかけて中世以降の信仰に関係する遺跡も数多い。赤石山系支脈の北端は諏訪湖から流れ出ている大竜川によって切られており、その付近に遼か頂きを覗かせている鉢盛山が望める。

3. 調査の歴史

永明寺遺跡は茅野市ちの上原字永明寺にある。字永明寺は永明寺山の上原側山裾から、米沢境の山頂に至る広大な地域にわたっている。伝承ではこの一部に破却された永明寺という寺院があり、頼岳寺の開基によって本尊も同寺に移したとされている。しかし、口伝としては残っているものの頼岳寺が火災に再三遭遇しているため本尊や永明寺に関する文書類も消失したらしく同寺にはほとんど現存していない。

現在判明している永明寺の記載で初現となる文書は県宝に指定されている1538(天文7年)の大祝職位事書(資料①)である。

(前略)二月三日ニすでに御即位に及び、御馬にめし候時、有賀殿・真志野殿・小坂殿会下永明寺の住寺(持)をたのみ申、佐言被申候へ共、不罷成候間、長老祝殿御馬の口をとり、大方へひきいれ披申候。(後略)とある。

続いて1588(天文16年)「諫訪上下社領案文」(資料②)に

(前略)…武拾六貫八百九拾文 右之内六貫文 流引 永明寺 (後略)の記載が見える。

永明寺に関する文書の中で堂宇があったとされる時代の残っているものはこの2通だけである。

近世末の「諫訪郡諸村並舊賤年代記」(資料③)に

(前略)千鹿頭東之方澤向留山水永明寺三河國ニ本寺有云

寛永七年譯有テ炎上ス此所新沙上ニ諫訪美作守様御石碑有 同年小林山頼岳寺建(後略)とある。頼岳寺には諫訪頼忠の宝匣印塔があり、永明寺殿光山宗謙庵主慶長十年乙巳八月十一日と刻まれている。

近代になって竹田凍淵(1850~1926)が永明寺の本寺、末寺の関係や、歴代等について調べていたようで、これについては後に山田茂保が1930(昭和5年)『永明寺史蹟遺跡の概観』で、諫訪史談會は1932(昭和7年)『永明寺史蹟要項』で、矢崎源藏も1942(昭和17年)『永明寺を尋ねて』『郷土』第4巻第31号等で取上げ、竹田凍淵翁の話として記載している。この中で矢崎氏は竹田氏の話をもとに1931(昭和6年)静岡県に出向いて聞き取り調査を行った内容を同書で紹介しているが、伝承、伝説の追及の域を出ず、寺院址の遺跡として研究することはなかった。

永明寺遺跡の考古学的調査は信濃教育会諫訪部会が1924(大正13年)の『諫訪史』第1巻発行に伴い実施しているのが最初である。同書の「諫訪郡先史時代遺物発見地名表」には永明村上原永明寺発見の遺物として打石斧、土器があり、所在は矢崎源藏と記載されている。

茅野市で1986年に発行した『茅野市史 上巻』の永明寺山周縁の遺跡と立地のなかで

(前略)山裾より一段上がったテラス状の台地に立地する遺跡として、一本桜・藤塚・十二坊・永明寺・柿ノ木平の諸遺跡がある。上川沖積地を見下ろす眺望のよい場所で、占地する地形も広く一本桜遺跡のようにある程度の規模を持つ集落遺跡と考えられる。十二坊・永明寺・柿ノ木平は上原城跡の西麓にあり、绳文時代中期の土器片や各種の石器類が採集されている。(後略)

と記してある。長野県教育委員会で1980年に発行した「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書 昭和54年度」から現在登録している遺跡番号101を使用しており、同書には永明寺遺跡の遺構、遺物として縄文時代の加曾利E式土器、石鐵、石匙、打製石斧、平安時代の土器群、須恵器があると記されている。1991年に茅野市教育委員会で発行した『茅野市遺跡台帳』はこれを踏襲しているが、いずれの記載にも中世の遺物は確認されていない。発掘前に実施している表面採集では調査区周辺がほとんどリソグロのため遺物も少なかった。堂宇の実態については不明な点が多く、調査区一帯はかつての水田から桑畠、近年は果樹園に転作されており、鉄道開通時に若干碎石用に石が運び出されたと云われているが今まで大規模な造成もなく中世の景観

がそのまま残っていた。今回の発掘調査期間中に地元の方々から調査区周辺に山門跡、ラントウ（卵塔）と呼ばれている場所があること、地権者が祖父から「明治か大正の頃山際で耕作中に仏具と刀が数本出土したことがあり、祟りを恐れてそのまま埋めた」話を聞いており、埋めた場所の地点は判らなくなつたが、調査区より50mほど千鹿頭廻に寄った付近らしい——とのことである。また、『永明村史稿要項』に岡入りで永明寺墓地にある源訪美作守源頼雄の墓石について紹介されているが、墓石は現在頼岳寺墓地に移され現地にはその残骸がある。

資料①新編信濃史料叢書第7巻

資料②茅野市史中巻

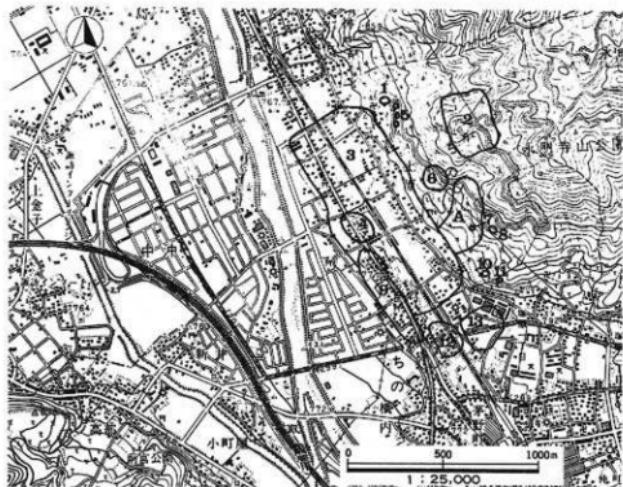
資料③諏訪史料叢書第14巻(復刻諏訪史料叢書第3巻)

第2節 永明寺遺跡周辺の遺跡

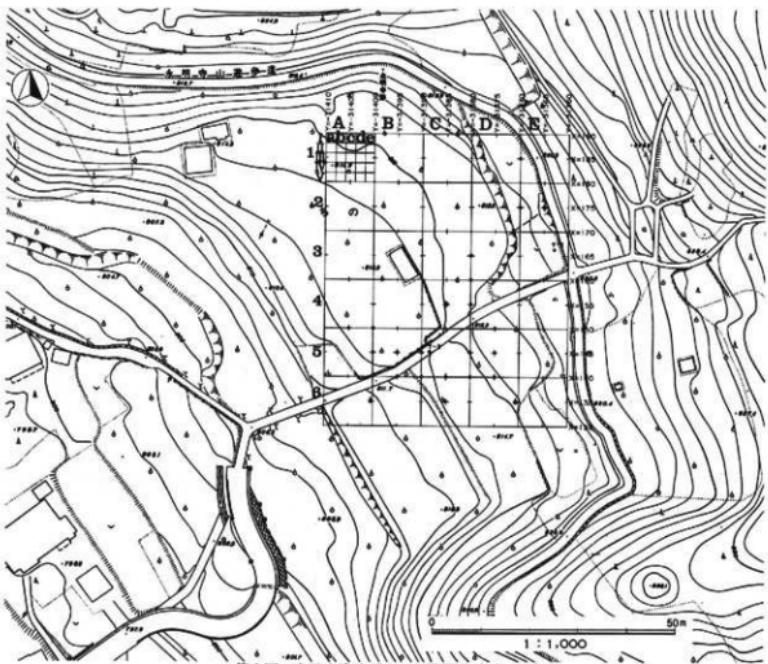
永明寺山麓の諸遺跡についての概要は『茅野市史』上巻、同中巻に詳しい。ここでは特に永明寺遺跡が位置する、上原地区の遺跡について簡単に紹介しておく。

- ①鉄古墳古墳 永明寺山麓西側、諏訪市境の頼岳寺境内北側にあり、古くから石室が南方に開口している。副葬品については不明である。
- ②上原城跡 永明寺山の支尾根上にあり、諏訪惣領家の本拠地であった。諏訪地方において実戦が行われた数少ない城のひとつである。
- ③上原城下町遺跡 上原城址の南西に位置し、平成2年茅野市教育委員会で詳細分布調査を実施し、中・近世の建物基壇や近世水田跡と該期の遺物が発見されている。
- ④地蔵堂遺跡 『茅野市遺跡台帳』に遺物として加曾利E式土器片、石鎚の記載がある。
- ⑤上原矢穴古墳群 頼岳寺裏周辺の神戸境から祐ノ木平に4基あった古墳で『諏訪史』第1巻にも甚だしく破壊せられた——との記載はあるが、現在所在がはっきりしない。
- ⑥板垣平遺跡 上原城の麓から平坦地にかけて位置し、昭和57年茅野市教育委員会で部分的な発掘調査を実施した結果、水路跡や列石、土石台等が検出されている。
- ⑦薬師堂上古墳 十二坊薬師堂の西裏にある山道際の畑内に、石室の残存と見られる大石がある。
- ⑧十二坊古墳 『茅野市遺跡台帳』に遺物として土師器、須恵器がある。
- ⑨光明寺遺跡 上川の段丘面にあり、縄文時代中期、後期、平安時代の遺物が出土している。
- ⑩武将の古墳 永明寺の東側、藤ノ森の西に当たる。出土品は鐵鎌の実測図がある。「武将の古墳」の碑が建てられている。
- ⑪藤塚古墳 十二坊内にあり、『諏訪史』第1巻に発掘の記載がある。
- ⑫構井遺跡 茅野有料道路及び都市計画街路の建設に伴い、昭和57年茅野市教育委員会で発掘調査を実施し、弥生時代、古墳時代、平安時代の住居址各1軒を発見している。隣接する阿弥陀堂遺跡⑬とともに古代の中核をなす集落遺跡である。

- A 永明寺遺跡
- 1 鉄古塚古墳
- 2 上原城跡
- 3 上原城下町遺跡
- 4 地藏堂遺跡
- 5 上原矢穴古墳群
- 6 板垣平塚跡
- 7 薬師堂上古墳
- 8 十二坊古墳
- 9 光明寺遺跡
- 10 武将の古墳
- 11 藤原古墳
- 12 橋井遺跡
- 13 阿弥陀堂遺跡



第1図 永明寺遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25,000)



第2図 永明寺遺跡グリッド設置図 (1/1,000)

第II章 発掘調査の概要と諸事業の記録

第1節 発掘調査の経過

1. 発掘調査に至る経過

平成7年度市道藤ノ森線改良工事に伴い、工区内に永明寺遺跡が該当する可能性が判明したのは平成7年である。茅野市教育委員会は遺跡の範囲となっていた同線前年度工区内で時期不明の造成跡を確認していくため、4月工事担当の建設課と協議を行い、遺跡範囲の確定を含め同年5月から6月にかけ3回にわたる表面採集を実施した。その結果、永明寺遺跡の範囲は今までより南側に広がる事が判明し、保護協議の結果、発掘調査による記録保存をすることを決定し、茅野市教育委員会は9月補正予算を提出した。11月15日付け7教文5-239号で長野県教育委員会教育長から「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」が茅野市長あてに発信される。当初の発掘調査予定は11月初旬開始、12月末終了の計画だったがリソグの収穫、木の移転時期に調査期間が重なったため12月に入ってからの発掘開始となった。

2. 発掘調査の経過

12月1日発掘調査開始、平成8年1月9日発掘調査終了。同日、建設課に引渡しを行う。

3. 調査日誌抄

平成7年

- 12月1日 発掘機材並びに測量器材の点検整備と現地での表面採集開始。
- 12月4日 機材搬入。
- 12月6日 重機による表土剥ぎ開始。道路予定地の下側から遺構検出を実施する。
- 12月7日 石垣の検出作業を始める。
- 12月12日 基準杭測量開始、中世の天日茶碗の破片、古墳時代の高杯破片が出土。
- 12月13日 長野県教育委員会原明芳主事来訪。
- 12月14日 遺構検出終了部全面が凍結、以降の調査期間中解けることはなかった。
- 12月20日 地元からの見学、来訪者多し。
- 12月22日 重機を再び導入。
- 12月26日 ラジコンによる空中写真測量実施。
- 12月27日 掘りぬき作業。

平成8年

- 1月5日 遺跡遠景撮影。
- 1月9日 整理終了、すべて引き渡す。

4. 遺物整理と報告書作成の作業

- 1月10日 本格的な整理作業を始める。
- 3月28日 永明寺遺跡発掘調査報告書発行。

第2節 発掘調査の方法

1. 発掘調査組織

本調査は茅野市教育委員会の直轄事業として実施し、その組織は次ぎのとおりである。

調査主体者	両角 敏郎	(茅野市教育委員会教育長)
事務局	宮下 安雄	(茅野市教育委員会教育次長)
文化財調査室	両角 行美 (文化財調査室長)	鶴岡 幸雄 (文化財係長)
	小林 深志 大谷 勝己 功刀 司 小池 岳史	守矢 昌文 百瀬 一郎
	小林 健治 柳川 英司 大月三千代	
調査担当者	百瀬 一郎	
発掘調査・整理作業参加者		
	鶴岡 澄雄 植松 博視 金子 清春 木川 交詞 塩原 博子	
	篠原 リカ子 長田 真 花岡 照友 小平 義市 小平 三行	
	平尾 弘子 宮坂 ちよ江 宮坂 ひとみ	
基準杭測量委託	両角測量 株式会社	代表取締役 両角義喜 (茅野市塙原2丁目4番6号)
航空測量委託	株式会社 東京航業研究所	代表取締役 中本直士 (埼玉県新座市北野3丁目10番16号)
		発掘調査期間中、地権者並びに地元上原の方々には埋蔵文化財に対して深いご理解と協力を賜りました。
		また寺島博夫、宮坂光昭、原 明芳、三上徹也氏からは貴重で有益なご指導、助言を賜りました。ここに深甚なる謝意を表します。

2. 発掘調査区の設定

永明寺遺跡は本格的な発掘調査がされることなく全体像は不明であった。そこで、表面採集を中心とする踏査結果をもとに、構造物分も含めた道路敷予定地全面に設定する予定だったが、発掘開始時点で本工事が発注されていたため、2m以上の盛り土部分はトレンチ法による調査を行い、遺構の検出があった場合は拡張することにして範囲を決定。グリッドの設定は座標系第VII系X=140.000, Y=-31380.000を基準軸とし10m四方の大グリッドの中に2m四方の小グリッドを配置し、大グリッド小グリッドとともに東西軸を数字、南北軸をアルファベットで表し、大グリッドは大文字のアルファベットとアラビア数字、小グリッドは小文字のアルファベットとローマ数字の組合せで例えばA a - I Iと表示して小グリッド一つ一つをブロック分けしている。

第3節 遺構と遺物の概要

1. 遺構の概要

遺構として検出したものは、野面積みの石垣一面、土石混合による造成面が4個所、礫敷きの造成部1個所、割り石による造成部が1個所、ピットが1基である。

2. 遺物の概要

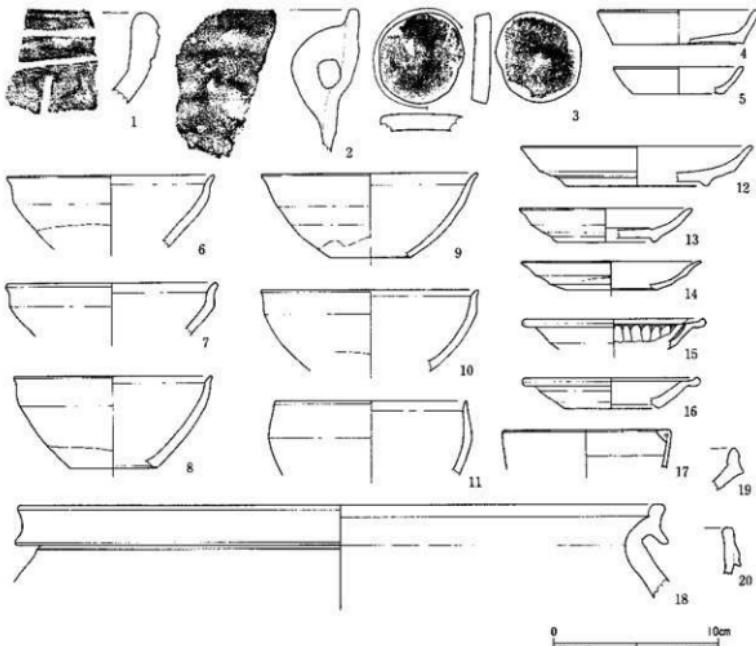
遺物は接合後の総数、265点である。

石器は黒曜石が2点、打製石斧の一部が1点出土している。

土器は縄文時代中期後葉曾利期の深鉢口縁1点（第3図1）と、古墳時代の高坏脚部1点、平安時代の内面黒色坏片2点が出土しているが量的には少量で造成面上とE区覆土の中から出土したものが多く、運ばれてきた土に混在していた可能性が高い。

遺物で多いのは中・近世の陶器器、カワラケ、内耳土器等で、陶器器の主構成は火窯期が占めている。全て破片で接合の結果、完形となるものは無く、部分的なものも含めてカワラケ2点、鉄軸天目茶碗6点、腰皿1点、丸皿2点、折縁皿2点、青磁香炉1点、甕1点の器形復元が可能であり（第3図4-18）、内耳土器の口縁（第3図3）、擂鉢の口縁（第3図19、20）、内耳土器を用いた上製円盤（第3図3）も図示しておく。

近世、近現代の遺物はいずれも造成面より上層から出土している。



第3図 出土遺物 (1/3)

第III章 発掘された遺構と遺物

第1節 永明寺遺跡の層序

永明寺遺跡の発掘調査区は4個所に分散しており調査区外周で3個所、旧道路敷で2個所の合計5個所を対象として層序の測量地点を設定した。(第5図)

層序は上位から1. 黒褐色土(表土)、2. 黒褐色土、3. 暗灰黄褐色土、4. 暗褐色土(水田床土)、5. 暗灰褐色土、6. 暗褐色土(水道跡)、7. 黒褐色土(擾乱)、8. 暗灰黄色土(遺構確認面)、9. 暗灰黄色土、10. 暗灰黄色土、11. 暗灰褐色土、12. 暗灰黄色土、13. 暗灰黄褐色土、14. 暗黄色土となっている。各土層の性質は下記のとおりで、いずれも風化した花崗閃綠岩を含む。

第1層は腐葉土、耕作土と風化し砂状になった花崗閃綠岩からなり色調は黒褐色を呈する。粒子は粗く縮まりが無い、粘性は弱い。

第2層の色調は黒褐色を呈する。粒子は粗く縮まりが無い、粘性を認められる。2cm以下のローム粒子、ブロックを少量含む。

第3層から遺物を包含する。第8層の再堆積したもので色調は暗灰黄褐色を呈する。粒子は細かく縮まりがあり、粘性は強い。3cm以下のローム粒子、ブロックを多量に含む。

第4層は水田の床土をかなり含み色調は暗褐色を呈する。粒子は細かく縮まりがあり、粘性は強い。1cm以下のローム粒子、ブロックを少量含む。

第5層の色調は暗灰褐色を呈する。粒子は細かく縮まりがあり、粘性は強い。1cm以下のロームブロックを少量含む。

第6層は水抜き用の水道跡で色調は褐色を呈する。粒子は細かく縮まりがあり、粘性は強い。鉄分を多く含む。

第7層は木の根によると思われる擾乱層で色調は黒褐色を呈する。粒子は細かく縮まりがあり、粘性は弱い。

第8層から中世の造成土となる。風化した花崗閃綠岩の山砂により主構成され、バームクーヘン状のごく薄い堆積を見る事ができるが、層序は明らかに分層が可能な部分で順番付けしている。本層の色調は暗灰黃褐色を呈する。粒子は細かく縮まりがあり、粘性は強い。5cm以下のローム粒子、ブロックを多量に含む。

第9層の色調は暗灰黄色を呈する。粒子は細かく縮まりがあり、粘性は強い。1mm以下のローム粒子、3cm以下のロームブロックを多量に含む。

第10層は第9層の性格に近くローム粒子、ブロックの量が少ない。

第11層の色調は暗灰褐色を呈する。粒子は細かく縮まりがあり、粘性は強い。1mm以下のローム粒子、5cm以下のロームブロックを僅か含む。

第12層は第9層の性格に近く3cm以下のロームブロックを少量含む。

第13層の色調は暗灰黄褐色を呈する。粒子は細かく縮まりがあり、粘性は強い。1mm以下のローム粒子と1cm以下のロームブロックを少量含む。

第14層の色調は暗黄色を呈する。粒子は細かく縮まりがあり、粘性は強い。2cm以下のローム粒子を多量に含む。風化している砂の量は他層に比較し少ない。

第2節 遺構と遺物

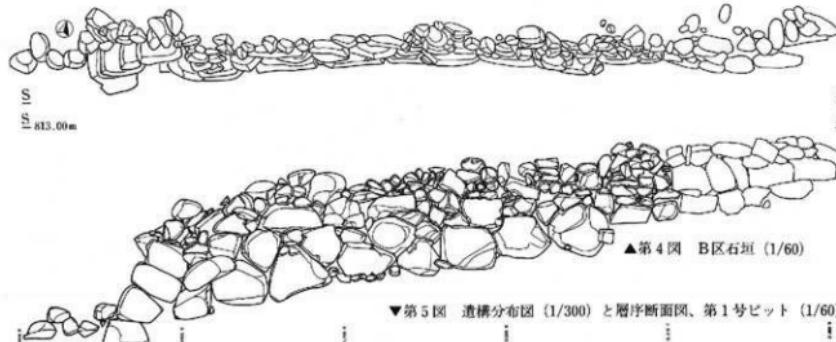
遺構の検出は本工事の工期との関係から協議の結果、構造物に入る部分と、削る部分を中心に実施することになり、調査は構造物の影響が及ぶ可能性がある深さまでとしている。造成部については完全な掘り抜きができなかった所がある。また、新市道の道路敷き土となる石垣と水路はそのまま埋め土保存されている。

1. 造成面（第5図、図版1-②）

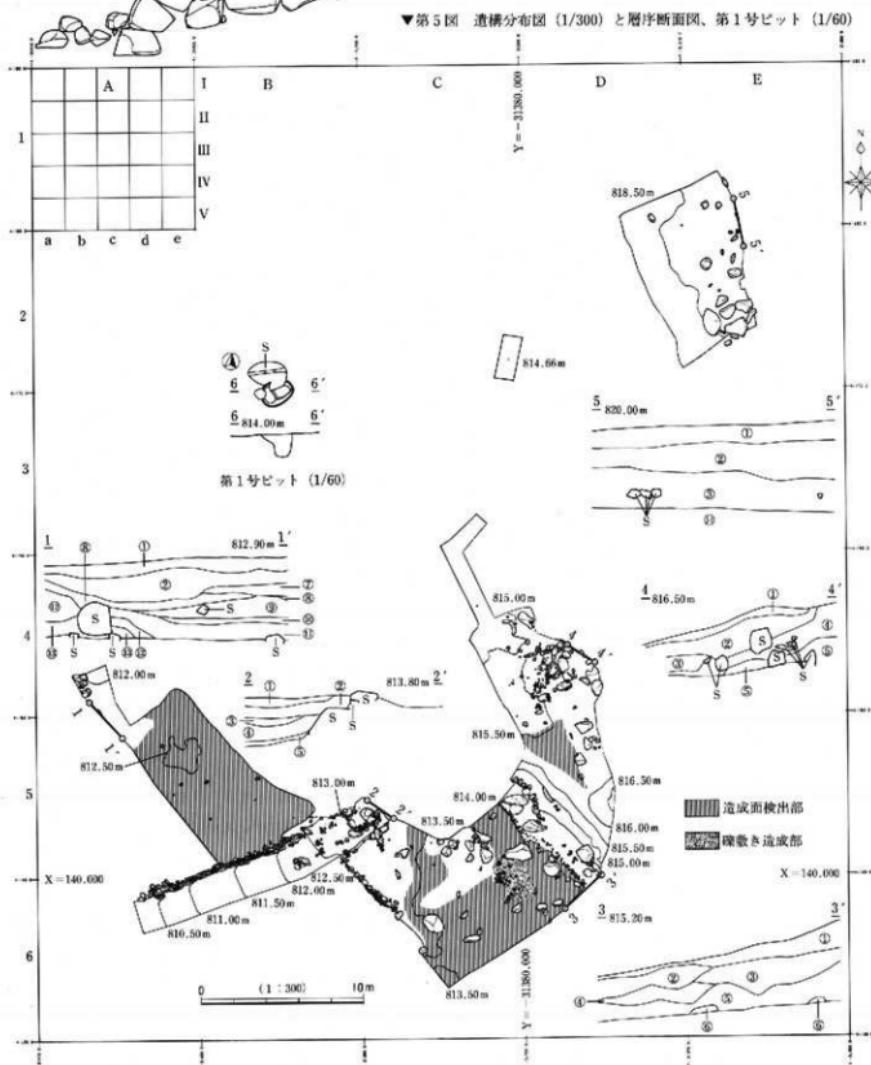
調査区が道路敷部分だけのため全容を知ることはできないが現在階段状になっているリンゴ畠のA-5・B-6(A区)、C-6(C区)、D-5(D区)各グリッドを中心として検出している。造成部は谷を基盤層である花崗閃緑岩が風化し砂状になったものを凹地に引いて埋め、平面を造り出している。引かれている造成土はバームクーヘン状に薄く幾層にも堆積しているが、調査区内で版築状に堅く突き固めた塊の検出はない。埋め土内の礫は全て花崗閃緑岩でいずれも手でもち運ぶことができる大きさ、重さである。造成面を掘りぬいて調査できたのはA区の層序測量地点だけであり、凹地を埋めるには両側からある程度の厚さで造成土を引いて、双方が接する面は斜めにすり合わせている。他の谷や凹地も同様に造成した可能性が高い。しかし、版築による造成とは異なっているため、水田となっているうちに経年変化で谷の中央が沈下して、明治時代には、現在の道路東側にあった水路の取水口を上げ、水田の中に飛び橋を渡し、尾根際側から水を入れ、全面に水を行き渡らせる様にした跡が調査区外に残っている。遺物は中世の陶磁器が目立ち、遺物包含層内から黒曜石と近世陶磁器が出土している。

C区はA区の造成面と比高差約1m、道路で区画されている。造成面にはリンゴの木を移植した時の搅乱が極めて硬い基盤層まで及んでいる部分があり、また山側の基盤層は大きな礫は残したまま、ほぼ水平に削り出している。埋めた部分と、削り出した面の境となる付近から東側にかけては26cm以下の割り石により造成した部分がある。この造成部からやや離れて南東から北西に若干蛇行する幅24~32cmで礫が詰められた水抜き用の水道があり、北東側は上手となっていたが、土手の表土を剥ぐと南東の隅で石垣の根石と思われる2個並んだ礫を検出しているので、土手の部分も本来は石積みがあったが崩されたり、抜かれたりしている可能性がある。この調査区のD-a-6 IIグリッドに本遺跡内でただ1個所のピットを南東側の壁近くの削られた造成面で検出している。ピットの深さは29cmを測り、壁面、底面ともに堅く縛まり、途中、礫に接する付近で避けるように段がつく、段下の深さは17cm、径が20cmではほぼ垂直に穿たれている。調査区外に連携するピットがある可能性は高い。遺物は古墳時代の高环脚部、平安時代の内面黑色环、中近世のカワラケ、内耳土器、施釉陶器、貿易陶磁器等が出土している。中でも中世の遺物が占める割合が高い。出土状況は全て破片で搅乱部内も含め、ほぼ全面に散布が認められる。特に水道の中程から南側と、東隅の礫が2個並んでいる周辺には、いずれも別個体の破片が数点まとまって出土している地点がある。

D区の造成面はC区との比高差約2m、南側の土手に5mほどの硬く締まった面を検出している。また現道の下から礫敷きの部分を検出しているが、この面は長方形で北側にやや曲がり調査区外に続くと考えられる。調査区の北側に10m程離れた所に2×4mの試掘トレンチを入れた。ここは現在の果樹園から約4mの上盛りをした上に道路を開ける部分であるが、リンゴの木があるため重機を入れられず手掘りで調査している。表土はほとんどなく草の下は堰を流れてきた川砂が厚さ約20cmに堆積している。D区から北西に延長したトレンチの造成面とほぼ同レベルである。砂は堆積しているがレベルから見て池跡とは考えられず後世の水田に引き水した際溜ったものと想定している。遺物は道路敷きだった部分も含めて中・近世から現代に



▲第4図 B区石垣 (1/60)



かけての陶磁器片が、また近世磁器片を粘土に練り込み高温を受け部分的にガラス化が認められる構築物の一部が出土している。延長したトレンチ内と試掘トレンチ内から遺物の出土はなかった。

2. 造成面以外の調査区

E区はD区から延長したトレンチとの比高差約4m、永明寺山遊歩道に接する長字畠の跡であるが、10年近く手入れがなくノイバラが繁茂していた。ここは人工造成の跡が認められず地山と思われる硬いフラットな面まで掘り下がり、遺構の検出もなく、遺物も上部で绳文時代中期後半の土器片など少量が出土しただけである。

A区の南東側、C区との間にある道路と石垣の立体構造物部分をB区と設定した。

A区に接する石垣（第4図）は野面積みである。永明寺遺跡内にある他の石垣は打込剥ぎと、近代の墓地には切石積みも見られる。石垣を構成するのはほとんど地山の花崗閃緑岩で、他には24cm以下の河原石が3個使われているだけである。

根石に使われているのは全て花崗閃緑岩で、道路に沿い西南西から東北東に向かって6.80m、トップの高低差は1.44mで9個が残っている。ただ根石のなかで下から2番目にあったものは引き抜かれた可能性があり、道路反対側の果樹園脇に根石であったらしい礫が転がっている。その上に積まれていたと思われる礫は若干崩れたような状態であるが、3番目以後の礫積みに影響は及んでいない。地権者によると昭和30年まで幅5尺だった道路を2mに拡張した際に石垣の一部も動かしたようだが、これとは明らかに区別できるため、ほとんどの根石と、A区造成面までの石垣については旧状を保っているようである。一番下で西南西隅にある根石はほかの8個とは異なり若干小さい角錐台形の自然礫を用いており、ほぼ直角となる部分が表に向くよう意識して据えたと思われる。この隅から北北東に石垣が続いている。しかし、果樹の根による崩落のため積みなおされており、旧状は全くとどめていない。

隅の根石上には、ほぼ直角となる面を表に向かせた礫が3段あり、奥に向ってやや下がる牛乳積みとなっている。2番目の根石は若干崩れた状態で検出し、上に3個の礫が確認できるが、2段目までは根石が抜けた影響が顕著である。3番目以後の根石上は隣接する礫との隙間を埋め、更に3段目以上は段ごとの水平を意識して積み上げている。道路敷きはコンクリート舗装されてあったため、剥がして調査したが、石垣に接する道路敷き内に礫は無く、それより上部において石段を検出している。石垣の上部は下段とは明らかに異なる割り石で構成されており、道路拡幅時と、その後の消毒用パイプを埋設した際に、石垣東北東側の一部は最下段の礫を残して道路外側へ押し出すように積み換えて、この石垣内には角柱状の石や道路敷きの石を割って積んだと考えられる礫がある。上段と下段の境付近がA区の造成面と接しているので、中世以来の石垣が部分的に残存し、機能し続けていた可能性が高い。

C区に接する道路敷き内から石組の水路を検出している。石組は石垣に比べ小さな礫を用いた野面積みで全て花崗閃緑岩により構成されているが、下部はパイプ埋設時に取外してしまったらしく途中で切れている。現存するのは長さ173cm、幅33~48cmである。水路底は3段の階段状を成し、高低差が101cmある。水路底は花崗閃緑岩の川砂が堆積し、下方に水路床をかさ上げした跡も認められる。構築時期については不明であるが川砂の中からあまりローリングを受けていない天目茶碗の破片が出土している。

第IV章 総括

1538年「大祝職位事書」に現れる永明寺の存在についての調査は、考古学的物証となる遺構、遺物を取り上げることがほとんどなく、明治から昭和初期にかけての伝承や文書を取り上げた論考が現在も罷り通っている。近年、板垣平遺跡、上原城下町遺跡は狭い範囲ながら発掘調査を実施し、遺構の検出、遺物の出土があった。源訪地方の中世史における永明寺遺跡の性格を示す上で、特に重要視しなければならないのは、周辺の上原城址、板垣平、上原城下町など中・近世の遺跡との関係である。

大正時代すでに確認されていた永明寺遺跡ではあるが、当時は中世の遺跡よりも、それ以前の遺跡として捉えており、今回の発掘調査で出土している最も古い遺物も縄文時代中期最末の土器である。他に古墳時代、平安時代の遺物の出土がある。中でも古墳時代の高坏脚部の出土は今回、調査区外ではあるが、遺跡内にある地蔵の性格を考える上で、未知の古墳が存在する可能性を示すもので重要である。

調査区域が限られている中で、最大の成果は文献に永明寺が登場する16世紀後半の造成面を検出したことと、該期の遺物の出土である。谷に立地する必然性があり、いわゆる中世的空間である造成盤の確認は、人為的に削り、埋める大土木工事をしてまでも、広い平面を造り出すことを必要とした構築物の存在が想定できる。仏教的遺構、仏具はなかったが、所在も漠然として不明であった永明寺址の極く一部を垣間見た可能性がある。造成面の一部は後世の擾乱を受けているが、中世の造成地割りがあり改変されることもなく、ほとんど旧状を保ったまま存続し続けてきたと考えられる。

発掘調査区と造成地割りと思われる区画、地元に残る地名伝承を重ねると一致する点が多い。A調査区の南西に隣接してなだらかに傾斜している荒畠を山門と呼んでいるが、ここから下の果樹園は緩斜面にあり、水平を意識した造成面は部分的に認められないため、造成前の旧地形が残っていると考えられる。

荒畠の道路を抜んだ南東の果樹園は意識して造成した跡と思われ、これから3段に階段状の平な果樹園が連なり上の遊歩道に続いている。A調査区と現道に接する石垣は、石垣積みの技法として最も古く確立し、しかも打ち込み剥ぎ、切り石積みに比べ強固である野面積みが用いられている。この3技法が揃った石垣に高島城のものがある。同城の築城は1592年に始まっており、文献に見える永明寺の初現に遡ること54年で、この間に、源訪においても土木技術の大きな進展があった事に疑いの余地がない。遺跡の造成地割りの中にある石垣で野面積みはこの部分だけであり、造成の古い段階に伴う石垣であろう。また現道の下面で確認した括幅以前の道は造成部の地割り境付近で若干方向を変えているので、区割りに関連して整備された確率が高く、稟敷きや、石段状の部分も残っていることから、本來この道は石敷きであったと思われる。現在A区の北東に低い段を成すフラットな面を持つ果樹園があり、A区とD区から延長しているトレンチにおける造成面との比高差は約2mを測るので、途中により高い段が付いていたと考えるのが妥当であろう。D区東で現在の墓地下にあたる付近にはラントウと呼ばれている所がある。ラントウは卯塔であると思われる。中世の寺院における墓域は、構造物に關係する地割りの後背地に位置する場合が多く、源訪地方でも下源訪の東照寺跡に類例がある。これらの条件で永明寺遺跡を観ると、造成域は小尾根で区画される谷を埋めた長径約90m、階段状の短径約50mになると想定できる。

造成面で遺構を検出したのはC区だけである。まず造成面より上にある排水用の水道がある。これは水田床土の擾乱層下にあるので、桑畠に転作するにあたって埋設した可能性が高い。造成面に接地して直径12cm以下の花崗閃綠岩の割石から成る造成部を検出している。造成部は南北を地山の大石によって挟まれ、北西

から南東方向にかけての長径2.75m、これとはほぼ直行する短径2.4mで、西側隅は直角様を呈すが平面形は不正形である。土蔵下に敷かれている割石に類似しており、堅く締まった状態で検出している。この造成部から東に1m程離れた地点に、柱痕と思われるピットが1基あり、調査区外に連なるピットが存在する可能性もある。調査区内では建物の基礎、礎石、心礎、池など直接寺院址に関係する遺構の検出はなかったが、調査区外には仏具の出土伝承もあり、この地に在ったと比定されている永明寺についての論考は更なる資料集積を待ちたい。

今回の調査面積は遺跡の規模からすると狭く、全容を窺い知る遺構の発見も見られなかつたことから多くの課題が派生している。また諸事情により発掘作業の着手が遅れたため、整理作業は短期間で行うことになり、遺物の分析、考察面に不十分な点があることを記しておく。

永明寺遺跡のある上原区は特に遺跡保存の関心が高く、今回の発掘調査に当たっては関係各位からご高配、ご協力を得ることができ、その中には参考になることも多々あって感謝する次第である。

引用・参考文献

- 鳥居龍藏 1924 「諫訪史」第一巻 信濃教育会諫訪部会
山田茂保 1930 「永明村史蹟遺跡の概観」
諫訪史談会 諫訪史編纂会 1932 「永明村史蹟踏査要項」
信濃史料刊行会 1972 「新編信濃史料叢書」第7巻
長野県教育委員会 1980 「八ヶ岳西南麓遺跡群分布調査報告書 昭和54年度」
諫訪教育会編 1983 「復刻諫訪史料叢書」第3巻
茅野市 1986 「茅野市史 上巻 原始・古代」
茅野市 1987 「茅野市史 中巻 中世・近世」
信長野県史刊行会 1988 「長野県史 考古資料編 全一巻(四) 遺構・遺物」
茅野市教育委員会 1989 「山寺遺跡」
井上喜久男 1989 「近世城館跡の陶磁ノート(5)「愛知県陶磁資料館研究紀要8」愛知県陶磁資料館
茅野市教育委員会 1991 「茅野市遺跡台帳」
茅野市教育委員会 1991 「上原城下町遺跡」
茅野市教育委員会 1993 「干沢城下町遺跡」

図 版

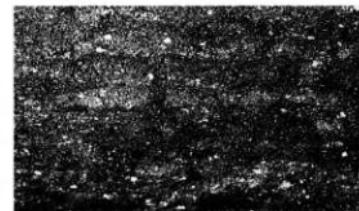


①上原城と永明寺遺跡（航空写真）



②永明寺遺跡調査区全景（航空写真）

図版 2



図版 3

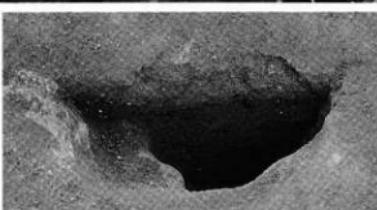
①C調査区全景



②C調査区礫敷き道成部
(航空写真)



③第一号ビット断面



図版 4



▲⑤遺構検出風景



▲⑥記録風景



◀③D区北側の試掘グリッド



◀④E調査区全景

報告書抄録

ふりがな	えいめいじいせき							
書名	永明寺遺跡							
副書名	市道藤ノ森線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
卷次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	石瀬 一郎							
編集機関	茅野市教育委員会							
所在地	〒391 長野県茅野市塚原二丁目6番1号 TEL(0266) 72-2101							
発行年月日	西暦1996年3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所取遺跡名	市町村	遺跡番号	度 分 秒	度 分 秒	調査期間			
永明寺	長野県茅野市 ちの	20214	101		19951201 19960109	357	市道改良工事 に伴う事前調 査	
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項			
永明寺	寺院址	中世	造成面3面	カワラケ、内耳土器、天目茶碗、すり鉢、貿易陶磁器			中世寺院址の一部を調査	

永明寺遺跡

——「市道藤ノ森線」改良工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書——

平成8年3月25日 印刷

平成8年3月28日 発行

編集 茅野市教育委員会
発行 長野県茅野市駒原2丁目6番地1号
☎ (0266) 72-2101㈹

印刷 篠友印刷株式会社
